

Great Expectations

——暴力と救い——

本 田 三 男

1. はじめに

Dickens 49歳のとき、1860年から61年にかけて AYR¹⁾ に掲載された *Great Expectations* は、後期代表作の一つに数えられる大作である。

1836年24歳のとき出版された *Sketches by Boz* をかわきりに、次々と作品を発表し、英国はもとより大陸の各国、アメリカにおいても大作家としての地位を確立していた Dickens は、1856年に終の棲家となる大邸宅 Gad's Hill Place²⁾ を購入した。

念願だった屋敷を手に入れて Dickens は、家族や友人 Wilkie Collins 等と素人芝居を楽しんでいたが、1857年に、自らの素人芝居一座に若くて美しい女優 Ellen Ternan を雇う。10人も子供がいて、20年以上の夫婦生活を送っては来たが、微妙な亀裂が二人の間に生じていたのが原因だったのか、Ellen の出現が誤解を招く引き金になったためか、1858年に Dickens は Catherine 夫人と正式に合意別居する。

この別居に端を発した出版社とのトラブルがもととなり *Household Words* から改名された AYR に Dickens は、1860年12月から61年8月まで自叙伝的大作 *Great Expectations* を発表した。

この作品はある意味であまりに暗く異様である。はたしてこの作品の中に、数年来続いてきた自らの家庭内でのごたごたと心労が何らかの影響を与えたのかどうか、実生活での女性に対する見方が、たとえ一時期だけのものであったとしても、屈折したものになってしまっていたからなのか、この作品はあまりにも暗く厳しい迫力で読者に迫ってくる。

50歳を目前にして、人生も晩年を迎えようとしている1860年に、凄まじいエネルギーとパワーで作品を書き続けてきた Dickens が、登場人物たち一人一人の描写が、まるで主人公 Pip の心の闇を構成する一つ一つの部品であるかのように機能し展開する、凄惨な作品を書き上げた理由は何か。作者は安らぎや安堵感や笑いを忘れてしまったかのような世界を提示しているが、果たしてこの作品にそれらのものがあるのかどうか。この後書かれてゆく彼の作品は、暗く厳しく重たいものが多いが、この作品がその事の解明の手がかりとなるのかどうか。この作品の分析が、それらの「謎」の解明に繋がるのではないかという期待を込めて、作品のテーマは何かを

考察してみたい。

2. 「暴力」のテーマ

この作品を強く支配し、作品の底を激しく暗く流れるテーマの一つが「暴力」である。それもいろいろな形態の暴力、物理的な、精神的なそして暗示的な暴力が、圧倒的なパワーで描かれる。違う状況であればユーモアと片付けることのできる Tickler³⁾ も、家庭内を支配せずにはおられない Mrs. Joe が使うとき、それは凄惨な幼児虐待の道具に変わる。何故彼女がこれほどまでに弟 Pip を虐待するのか。それも乳飲み子の赤ん坊のときから、二人きりになると、その子が憎しみ以外のどのような感情も抱けないほどの徹底した態度で、抵抗できない子供に暴力を振るい、いじめるのか。母親としての立場にも立つ彼女が、Pip を可愛いと思えない理由何なのか。作者はそれを語らない。自らそういった場面を実生活で垣間見たのか、それとも Mrs. Joe は単に作家の想像力で生み出された女性なのか、興味深いところだ。もしかしたら Pip は、自分と違ってハンサムな子で、その上賢くて、幼い弟に対する嫉妬心が彼女の残酷極まりない行動の原因であったのかも知れない。しかし作者は、激しいいじめを提示するだけでその理由を語らない。本来愛情を注がれるべき幼児期における Pip の環境は、姉だけでなく姉に同調する教区の人々によっても、惨めこの上ないものにされる。彼らの意見では、Mrs. Joe が自分を犠牲にして、手塩にかけて育ててきたのに、Pip にはそれが分からない。分からないのは Pip が 'naturally vicious'⁴⁾ だからだ。この大人の精神的な暴力に満ち溢れた環境で育ち、Pip が Orlick のように又 Estella の夫となる Drummle のように本質的に暴力的な人間にならなかったのは実に不思議なことだったといえよう。

Mrs. Joe の実際の暴力は、具体的な形で描かれることはない。夫 Joe と Pip に対するそれは、Tickler のような言葉で、オブラートに包まれて暗示されるだけだ。それだけに自制心を失った彼女のヒステリーの凄まじさは、読者の想像力にゆだねられているが、作者は Orlick との場面でその一端を垣間見させてくれる。

"You're a foul shrew, Mother Gergery," growled the journeyman. "If that makes a judge of rogues, you ought to be a good 'un." ... "What did you say?" cried my sister, beginning to scream. "What did you say? What did that fellow Orlick say to me, Pip? What did he call me, with my husband standing by? O! O! O! Each of these exclamations was a shriek. (p. 111)⁵⁾

Dickens は、夫 Joe と実の弟 Pip に対しては描くことのできない嵐のような暴力の場面を、存在そのものが「暴力」である Orlick を登場させて描いて見せた。この場

面で Mrs. Joe と Orlick は同質な人間であると読者には映る。二人の言葉のやり取りで Mrs. Joe はヒステリーの極限状態にまでいたり、Orlick は彼女に対する憎悪の念を深く深く心に刻む。

ひとつ注目しなければならないことがある。それは Joe とともにこの場面を目撃する Pip の心の中である。Pip の気持ちは Orlick の側にある。Orlick のののしりの言葉の一つ一つを、彼も姉に対して投げかけたいと思っている。作者は Pip の目線の中に Pip の心の中を描いてみせる。この場面は激しく強烈な場面であるが、主人公 Pip の姉に対する思い、時には憎悪にも似た彼の感情を理解する上で、欠かすことのできない重要な場面であるといえよう。

1860年9月30日 Dickens は、Gad's Hill から友人 Foster にあてて手紙を書いた。

...For a little piece I have been writing—or am writing; for I hope to finish it to-day—such a very fine, new, and grotesque idea has opened upon me,⁶⁾

作者が自分で 'grotesque' という言葉を使っているように、この作品は不思議な作品である。労働者階級に生まれ育った主人公が、「紳士」に成れるかもしれないという期待を持つストーリーであるから、当然中流階級の人々やさらに上流階級の人々も登場する。ところが、これらの登場人物がほとんど 'grotesque' なのだ。Havisham 婦人は上流階級に属しているが不気味な女性で、生身の人間というより幽霊を思わせる。Estella にしても、この上ない美人で貴婦人の教育を受けるが、Havisham 婦人の操り人形であり、他人への愛情に関して、最後の一线でそれを越える自分の意思を持たない。義母の男性に対する恨みが、異常なものであったといえばそれまでだが、それにしても彼女は 'grotesque' だ。

上記の Foster への手紙の直後、10月上旬に Dickens は再び Foster に手紙を書いた。その中で主人公は少年であることや、少年がある親方の徒弟になること、さらに、作品が大作になることを詳しく知らせている。又

...I have put a child and a good-natured foolish man in relations that seem to me very funny.⁷⁾

とも語り、鍛冶屋の親方、義兄の Joe についても言及している。連載を始める前の段階で Foster に書き送った Joe の人物設定は、外れているとまでは言えないが、作品完成時点での Joe とは異なっている。一見した Joe の外観や、彼の頭の回転や動作のろさは、妻である Mrs. Joe が苛々するほどであるかもしれない。しかし過激な妻との対比の中で、又 Pip と共に妻の家庭内暴力に耐える姿が描かれていく過

程の中で、彼の人格は侵しがたい厳肅さを帯びてきて、一種の「聖域」となる。つまり Pip がその世界を飛び出して後、常に良心の呵責を感じることになる世界に住む人々の象徴にまで昇華する。

幼い Pip から不思議に思われ、時には軽蔑さえされる妻への無抵抗。この理由を Joe は自らの幼児体験にあると語る。彼の父親は Joe の母親と Joe に対して日々暴力をふるい、それで彼は家庭内では何があっても暴力をふるうまいと決心する。‘a good-natured man’ と設定されているので、Joe の非暴力はそれなりに筋が通る。しかし現在では、暴力を体験して育った子供は暴力的になる可能性があるといわれている。さすがの Dickens もこの事には思い及ばなかったのかもしれない。Joe の人格描写は、それほど美しく、理想的だ。

Pip を取り巻く主要なキャラクターの中で、暴力とは別な世界で暮らすのは Joe と Bidly。Pip にとって、変わらず平和と安らぎの場所である Joe と Bidly の世界。その Joe が凄まじい暴力にさらされていた。Pip を恋し続けた幼馴染の Bidly も、大きな期待で出かけたピクニックの場面で一転、心に大きなダメージを受ける。自分にはどうしようもなく愛する女性がいるという Pip の告白は、この上なく残酷な言葉、この上なく無神経な仕打ちである。

Pip にそのつもりが無いのであるから、Bidly に対するこの行為を暴力と呼ぶことはできない。しかし Bidly は計り知れないダメージを Pip から受けたことかわりは無い。

作品の後半で Abel Magwitch の子供であることが分かる Havisham 婦人の養女 Estella も、成育過程において義母 Havisham 婦人から虐待を受けて育ったと見ることができる。物理的、肉体的な虐待ではないが、男性に対する憎しみ恨みをはらすための道具、操り人形として育てられ、男性だけでなく人間すべてに温かい感情を抱けない女性として成長したのであるから、Estella も親からの「暴力」を受け続けた子供なのだ。

Estella はさらに、Pip の‘彼だけは止めて’との懇願、それも Havisham 婦人の心まで動かした魂の叫びを無視して‘The Spider’すなわち Bentley Drummle と結婚する。傲慢で無礼。Pip が生理的嫌悪を感じるこの人物は、Estella につきまとい、ついに彼女と結婚する。丁度ジャーニーマン⁸⁾ の Orlick が Bidly につきまとうように。ところが結婚後 Estella は、夫の家庭内暴力に悩まされ、耐え切れず彼と離婚する。主人公 Pip が出会ったその瞬間から心をときめかせ、愛し続けることになる彼女にも作者は「暴力」という蜘蛛の糸⁹⁾ を張りめぐらせたのだ。

小さな子供が一人で出かけたくなるような場所とはとても言えない侘しい墓地が、姉の暴力を逃れてきて、心安らぐ場所であるとはなんと悲しい事である。しかし Pip はこの墓地でこの上ない恐怖を味わう。それも作品全体の「暴力」を象徴する

ことになる二人の人物に出会うことになる。監獄船から脱走した二人の人物。作品の後半で、Pipの精神的な成長に大きく関わる二人の人物。一人は、最初に恐怖心を植え付け、最後には彼の死をを看取ることで、最初に受けた暴力体験のトラウマを払拭させてくれる役割を持つ Magwitch。もう一人は、彼の昔の詐欺仲間、Magwitch を追い詰め、法廷の場で彼を有罪にする Compeyson。

作者は、作品冒頭で登場する恐怖と謎の人物、二人の男性の正体を明らかにすることで、この長編を覆い包んでいたすべてのことを明らかにする。Magwitch は、人格そのものに影響を与え、強烈な恐怖心を植えつけたが、同時に Pip を紳士に育て上げようと、全エネルギーを注いで大金を貯める。彼は、精神的な意味では、大恩人とわかった彼の「品のなさ」に耐え続け、ついには心の底から彼の平穩を祈れるまでに Pip を成長させる人物だった。本質的には暴力的存在なのに、それが主人公の心を寛大にし、彼の魂を救う存在となる。苦痛と救いが表裏一体であることを Pip に認識させ、彼を大きく成長させる重要な役割を Magwitch は持っている。

一方、紳士然とした Compeyson は、物理的には暴力的な存在とはいえない。しかし、彼が考えることや、あまりにも自己中心的で冷たい仕打ちは、多くの登場人物の人生を狂わせた。この作品の中で、張り巡らされた蜘蛛の糸の中心にいるのは誰か¹⁰⁾ と考えたとき、それは Pip でもなく Magwitch でもない。全ての出来事を逆に辿り、行き着く先に必ず姿を見せるのは Compeyson なのだ。彼が目をつけ詐欺を仕組んだ資産家の娘 Miss. Havisham が Estella や Pip に繋がり、作品全体の出来事が謎に包まれたまま展開して行く。彼が登場するのは、作品の冒頭部分と Magwitch を死刑判決へと追い詰める後半部分だけであるのに、彼が蜘蛛の糸の中心にいるのは何故か。ある意味で「謎解き」の物語と言えるこの作品の、ストーリー展開の中心に Dickens が Compeyson を置いたのは、彼の持つ「暴力」がこの物語の始まりに関わり、作者の描く暴力の中で、もっとも怖く、陰湿で強力なのは Compeyson の持つ「暴力」であるからだ。Mrs. Joe の Pip や夫 Joe に対する物理的な暴力や、Orlick の Mrs. Joe に対する直接的で残虐な暴力は、直接その場面が描かれることはなく、暗示的に示されるだけだ。それに反して、Compeyson の「暴力」は、自らの誇りを傷つけられた男の憎悪を含んで、執拗に描かれてゆく。そしてついに Magwitch を死へと追い込み、彼を助けようとする Pip をも苦しめる。

Dickens はこの作品の中で様々な形の「暴力」を描いた。作品が暗く厳しい印象を持つほど徹底的にそれらを描いて見せた。我々人間が持っている暴力的な一面を示そうとすることがこの作品の大きなテーマの一つであることは間違いないであろう。

3. ト라우マの克服

作品全体を「暴力」が覆い、支配し、そのために作品が暗く厳しい展開をみせるのはすでに述べた。しかし同時に作品には「救い」が描かれている。それによって Pip は彼の成長の過程でうけたトラウマから脱出する。このトラウマからの脱出は、Pip が真の「紳士」に成長できたことを意味しており、これもまた作品の重要なテーマの一つとなっている。

「救い」のまえに主人公 Pip の罪の意識が存在する。まず、Magwitch との関わりで、彼に対する恐怖心から、言われるがままに食料や Joe のやすりを盗み出した事。盗んだ食料については、そのことはそれほど Pip の心に罪の意識を与えず、ただ単純に見つかったらどうしようという、いたずらっ子の感じる不安が描かれるだけだ。しかし鍛冶屋職人 Joe のやすりを盗んだことについては、以後いつまでも Pip の心に Joe に対する裏切り、おおいなる良心の呵責として残ってゆく。Joe に対して良心の呵責を覚える。彼の心からどうしても拭い去ることのできない負い目は、Pip がひたすら「紳士」への道を突き進む過程の中で、形を変えて描かれ続ける。Havisham 婦人との面会の場面での Joe の対応に対するやりきれない恥の意識。心から信頼し、自分の味方だと考えている義兄 Joe の言葉遣い、態度、着ている服や靴にいたるまでが恥ずかしくてたまらない。Havisham 婦人が暮らす上流階級を良しとして、自分や Joe の生きてきた庶民階級、下流階級を恥と感じる意識。幼年期から少年期へと成長してゆく過程の中で、ひたすら「紳士」を目指しながら、常に Pip の心のどこかに存在し続ける罪の意識。これらの相反する意識の中で悩みながら成長してゆく主人公であるが、彼は結局前者を選ぶ。Havisham 婦人や Estella の属する上流階級の魅力が Pip を捉えて離さないからだ。

だがこの忘恩の主人公 Pip¹¹⁾ にも作者は「救い」を準備する。それは彼の持つ正義感、不公正に対する無意識の嫌悪感である。まだ言葉を話すこともできない幼いときから、姉 Mrs. Joe の理不尽な扱いや執拗ないじめを受けて育ちながら、Pip は周囲の大人を見分ける能力を身につけてゆく。目の前の大人が、真に愛情を持って自分に接してくれているかどうかを見抜く力を彼は持つようになる。この視点から判断すると、幼児期の Pip にとって公正でうそ偽りのない人物は、義兄の Joe と幼馴染の Bidley、そしてもう一人、脱獄囚 Magwitch の三人だけになる。Magwitch を Joe や Bidley と同列に置くのは不思議に思われるが、作者は彼に対する Pip の共感、思いやりの場面を描いている。両親や兄弟の眠る荒涼とした墓地で、寒さに耐えて、ひたすら不確実な食料の到着を待つ男の惨めさを、幼い Pip は思い遣る。自分を脅し、恐怖心を抱かせた男に対するこの不思議な感情はおそらく、Pip が彼の中にうそ偽りのない何かを感じ取ったからに違いない。

As I watched them while they all stood clustering about the forge, enjoying themselves so much, I thought what terrible good sauce for a dinner my fugitive friend on the marshes was. (p. 30)

この場面は、二人の脱獄囚を捕らえるための準備の場面だが、Pipの気持ちは、捉える側の者たちではなく、二人の囚人の側にある。自分に恐怖心を与えた男に、何故か Pip は共感をおぼえ、彼の惨めさを想像する。年端の行かない少年が、はじめて会った、それも自分を脅している囚人を、'my fugitive friend' と考えるのには大きな意味が込められている。Magwitch も自分も迫害され阻害されているという共感からくる考えだけでなく、Pip はこの恐ろしい男の中に、うそ偽りのない人間性を本能的に感じ取ったからではなかろうか。

すでに述べたように、この作品は陰鬱で、暗く厳しい場面が描かれ続ける。全体としては、「暴力」が支配する 'grotesque'¹²⁾ な作品であるから、それも不思議ではないかもしれない。それにしても作品は暗すぎる。Pip の心が安らぐ場面は、作品の終盤を除いてほとんど描かれない。Pip を恋している Bidly との有名なピクニックの場面も、描写は穏やかで美しく、二人の会話も和やかなものである。だが Pip の告白を期待していた Bidly にとっては、これ以上に残酷な場面はない。プロポーズの言葉ではなく Estella をどうしようもなく愛していると聞かされたのだから。

作品の与えるこの暗さ、陰鬱さは果たしてどこから来るのか。「暴力」がテーマの一つであるから、と言うのがその理由であることは間違いないであろう。だがもう一つの大きな理由は、おそらく、Pip 自身がひどく暴力的な存在だという点にあるのではなかろうか。Pip は姉から絶対に許せない、執拗な虐待を受け続けて育った。義兄 Joe の優しさ、逞しさも、姉の暴力やヒステリックな虐待の完全な防波堤にはならなかった。その時、Pip は何を考え、どのように行動したか。おそらく幼い彼の目は、恐怖の色を浮かべず、ひどく挑戦的であったに違いない。Joe と Bidly 以外の周囲の者達は、Pip を「すぐ増長する、言うことを聞かない、可愛げがない、生意気な」と形容する。また「暴力」そのものである Orlick と Mrs. Joe とのあまりにもリアルで強烈な言い争いの場面¹³⁾ で、Pip は Orlick に共感し、ただし心の中でだが、いつもの姉の制御不能なヒステリーの発作をながめている。この事は、作品最終盤で、Pip を殺そうとする Orlick の「お前の姉を殺したのはお前なんだ。」という恐ろしい言葉と呼応している。つまり、Pip の性格の少なくとも半分以上は Orlick 的なもので、この作品で彼が「紳士」に成長する過程は、彼の中からその暴力的要素を取り去って行く過程なのだ。

その為には、作品の中に「救い」となる要素がなくてはならない。本来なら公正大で公平無私な Joe や純真そのものである Bidly がその役割を果たしても不思議

ではない。しかし Dickens は二人にそれを与えなかった。Joe は善い人であるが尊敬できる義兄ではなく、あくまでも仲間であり、友達なのだ。また Bidly は Estella との絡みで Pip の「救い」にはなれない。そこで Dickens はこの作品の中に介護と看病の心を大きなテーマの一つとして挿入した。

周囲から、特に実の姉から虐待され、いじめられ、不公正、不正義の中で育った少年¹⁴⁾が、同様に暴力的になったとしても不思議ではない。作者は具体的な場面を描いて見せはしないが、それは Joe に対する後ろめたさ、忘恩に対する良心の呵責の形で暗示され続ける。作品全体が暗く陰鬱なのは、実は回想の形をとって物語を進める Pip 自身の中に、最も制御しがたい暴力的要素が存在していたからなのだ。だが同時に彼には、Joe が持っている正義感や公平無私な道德観に対する尊敬の念と憧れがあった。そしてこれが彼を Orlick とは異なる人物に成長させ、彼を真の意味での「紳士」へと育て上げたのだ。

Pip が持つ暴力的な一面や、紳士になりたいという上昇志向の一面は、作品の展開とともに彼から剥ぎ取られてゆく。まず Bidly であるが、彼女は Pip が心からの信頼を置く幼馴染である。その彼女が、孤児である自分の面倒を見てくれた女性の介護をして、彼女の最後を看取る。そして何よりも Bidly は、Orlick に襲われそのダメージから一人では生きてゆけない Mrs. Joe の介護を引き受ける。そして再び彼女の最後を看取る。

…, and said quite plainly, 'Joe.' As she had never said any word for a long time, I ran and fetched in Mr. Gergery from the forge. She made signs to me that she wanted him to sit down close to her, and wanted me to put her arms round his neck. … And so she presently said 'Joe' again, and once 'Pardon,' and once 'Pip.' And she never lifted her head any more, (p. 281)

Bidly から姉の最後を聞かされた Pip の心には、悲しみの感情は浮かんでこない。上記の引用部分は、Bidly の人間的な凄さを語っている部分だが、同時に、まだ Pip の心に本当の思い遣りの気持ちが生じていないことを示している。姉から受けた虐待への憎しみが強すぎて、彼女の死に際しても、彼は哀しみの感情をおぼえることはできなかった。

Joe や Bidly 以外に、Pip がその人間性を信じ、全幅の信頼を寄せる人々がいる。一人は Havisham 婦人の親戚筋にあたる Herbert Pocket。彼は Pip の親友で、彼の父親が「紳士」になるための修業の先生となる。二人の初めての出会いの場面で、Pip は Herbert を叩きのめすことになるのだが、不思議なことに Pip は彼を「善い男」と感じる。それは彼が Herbert の中に、正義の心や公平さを直感したからに他なら

ない。正体不明の恩人から渡される大金を手には、Pipは「紳士」になるためにLondonで暮らす。そこで彼は再びHerbertに出会うが、その瞬間Pipは彼を信頼できる人物だと思う。姉から受け続けた理不尽で不正義なうち。逆にそれから身についた人を見分ける力。自分自身がそうではなくても、JoeやBidleyと同質なものをPipはこの若者に見出したのだ。

Havisham 婦人の親戚で、上流階級に属してはいるが、Pocket家の暮らし向きは、決して楽ではない。Herbertの両親は健在ではあるが、老人性健忘症の初期の段階なのか、家の万事を取り仕切るのは、明らかに使用人たち¹⁵⁾という、なんとも滑稽な家族だ。しかしこの家族がPipの目にはほほ笑ましく、理想の家族に映る。さらに注目すべきは、Herbertの婚約者Claraである。彼女は引退した父親と暮らしているが、その父親の姿は見えず、二階から怒鳴り声やものを投げつける音が聞こえるだけ。この事は、明らかにClaraが父親の介護の日々を送っていることを示している。それでいてHerbertは、これらの事をごく自然に受け止めている。彼にとっては全てが当然で、Claraへの愛情とは何の関係もない。それどころかそれだけいっそう彼女への愛と尊敬の気持ちが深まっているように思える。Pipの回想として語られてゆく、この暗澹たる作品の明るい部分、つまり、Pipを彼のトラウマから救い出すものは何かを考えてきた。どうやらそれは、介護の問題に対する姿勢の中にあるといっても過言ではなからう。Bidleyの二度の介護経験とHerbertの婚約者Claraの介護の日々、そしてそれを当然と受け止めるHerbert。Pipにとって、この二人の生き様は、心に響くインパクトを与えずにはおかなかった。

次に、Pipに大きな遺産の期待を持たせ、実際大金を渡し続ける弁護士Jaggersの事務所で働くWemmickがいる。彼は仕事と家庭生活を完全に分けて考える一風変わった男だ。だがWemmickをPipは何故か無条件で信頼する。‘The Aged’と呼ばれる彼の父親は、明らかに老人性健忘症の段階にある。この父親をWemmickも彼の恋人も、Clara同様、ごく自然に親身に介護する¹⁶⁾。このWemmickの人間性をPipは善しと直感し、彼を信頼したのだといえよう。Dickensのこの設定は、少々不自然な感じはするが、青年期のPipが無条件に信頼できると認めた人物の描写で、いずれも老人介護を抱えている家庭を描いたのは偶然ではなからう。つまり作者は、Pipの持つ人格の暴力的な要素や、姉と同様に生まれつき備えている攻撃的な要素を制御するために、介護や看病の背後に求められる「思い遣りや公正な態度」を彼に与え、彼の「救い」にしようとしたのではなからうか。

だがPipが「救い」を手にするためには何か欠けている。それはPip自身の介護・看病の体験である。彼が心の底から思い遣りの気持ちを持ってそれを行い、初めて彼は、「救い」を手にし、幼児期の暴力体験からくるトラウマから脱することができる。そしてそれは作品後半のMagwitchとの関りの中で示される。

Magwitch が、深夜突然下宿に現れ、遺産の夢と大金を与え続けたのは自分だと告白したときの驚きと大きな落胆の描写は実に見事だ。がさつで粗野な Joe を Estella や Herbert に会わせたくないと感じたあの恥の意識と同じ意識が強烈に甦る。Magwitch のしぐさの全て、食事の仕方、煙草の吸い方、言葉づかい全てのものが Pip の嫌悪感を呼び起こす。だが Compeyson の執拗な追求と警察への告訴を受けて、Magwitch が追われる身になるとその嫌悪感が薄らいでゆく。さらに彼が逃亡の途中で傷を受け、それが致命的であると分かってからの Pip は、献身的にこの恩人を看病する。感謝の言葉と気持ちをそのまま受け留めながら、Magwitch の最後を看取る Pip は、もはや以前の Pip ではない。彼の到達した境地は Joe や Bidly、そして Herbert のそれと少しも変わらない。公明正大で、公平無私、そして何よりも正義がその生き様には感じられる。Dickens は、多くの怒りや暴力、理不尽な虐待からくる苦しみを経て、Pip にこの境地を与えた。これこそが Pip の真の「救い」と言えないだろうか。

4. おわりに

24歳のときに結婚し、20年以上夫婦であった妻 Catherine は、気持ちの穏やかな優しい女性だったと言われている。だが彼女は、あまりにも急速に進化し偉大になってゆく夫について行くことが出来ず、二人の正式な別居生活の数年前から酒をたしなむようになっていた。この時期、素人劇団に熱中し、無名の女優 Ellen Ternan に出会い、彼女に恋をした Dickens は、公然と彼女をパーティの席に同伴する。Ellen Ternan が先なのか、妻のアルコール依存が先なのか、いずれにしても、女性問題の悩みを抱えた45歳前後の Dickens の家庭生活は、想像しただけでも恐ろしい。少なくとも、10人の子供の母である Catherine のヒステリックな言動がときにはあったに違いない。

弁護士を介しての正式な別居の翌年、作者は *A Tale of Two Cities* の中にやり手の弁護士 Stryver と主人公 Carton を登場させた。さらに二年後から書き始められたこの作品でも、やり手の弁護士 Jaggery が重要な役割を担う。その意味で、後期の名作 *Great Expectations* に、直前の実生活における悩みや苦しみが影響を与えていないとは考えにくい。もちろん Dickens は想像力豊かな作家で、Catherine と Mrs. Joe Gargery を重ねて考えることは出来ない。だが、彼女の Pip に対する制御不能なヒステリーが物語の始まりであることは、作品のテーマを考えると重要で、彼女の虐待や暴力が一人の幼児の人格をいかに振じ曲げてしまったかを、我々読者は想像しなくてはならない。

作品の中に、過剰なほどに多様な暴力場面が描かれ、それが主人公の回想の形を

とって展開してゆくので、必然的に、物語り全体がやりきれないほど陰鬱になっている。特に Pip に関わる描写は、グロテスクでやるせ無い。それは彼が受けた「暴力」のダメージの大きさを意味し、同時に、彼自身もまた暴力的要素を内包している事を示すものだった。

次に本論では、Pip が人間として尊敬に値する「紳士」へと成長するときの手助けとなるものを、トラウマからの「救い」として示した。ここでは触れなかったが恩人 Magwitch を看病する前に、Pip 自身も Joe から献身的な看病を受けている。必要なときにそばにいて、病気が癒えたと判断すると黙って姿を消す Joe の人格は、当初作者が意図した「善良だがグロテスクな職人」とは違って、この上なく「善き男」、非の打ち所のない素晴らしいキャラクターとなっている。いずれにしても Pip は、Joe や Bidley、さらには Herbert や Wemmick の前に立って、何一つ非難されることのない「紳士」に成長した。Magwitch の死で、遺産を受ける望みがなくなり、自らの才覚で生きてゆかなければならない境遇になっても、彼の心に曇りは無い。それを助けたのは、多くの友人たちが介護や看病の場面で見せた、尊敬に値する公明正大な「思い遣りの心」だったのだ。

最後に、Dickens の後期の傑作と言われるこの作品について、書き残したことが数多くある。作品の中で多く引用される Shakespeare¹⁷⁾ のドラマの意味は何なのか。何故田舎芝居の劇団は Hamlet を上演し、それについての描写がくどいほど詳細に描かれてゆくのか。また Joe がハンマーを振り上げ、「クレアー様」の唄を唄う、その歌の引用はどのような意味を持つのか。さらに Dickens が好んで引用する「マザーグースの歌」や、当時流行っていた雑歌の意味は何を意図したものか。作品が 59 章、473 ページにも及ぶ大作であるだけに、触れずに残した問題が多いのは大いに残念だ。次回機会があれば、これらについても考えてみたい。

注

- 1) 週刊誌 *All the Year Round* のこと。*Household Words* の後を受けて 1859 年に創刊された。
- 2) 作者が 8 歳のとき家族と Chatham に住んでいたが、当時こんな家に住みたいと憧れていた邸宅。1856 年 44 歳のときに購入。以後死ぬまでの屋敷で暮らした。
- 3) Tickler は「くすぐり棒」で、Mrs. Joe が幼い Pip のしつけの為に使用した。実際には、虐待の為に使われた。
- 4) 'vicious' は正しくは 'vicious' であるが、作者は意図的に人々の学のなさや訛りのある発音を示す為に使った。
- 5) 本論で示すテキストのページは、*The Nonesuch Dickens, Great Expectations · Hard Times*, 復刻版 本の友社、1996 のそれを示す。

- 6) The Nonesuch Dickens, *The Letters of Charles Dickens*, Volume III: 1858—1870, 復刻版 本の友社, 1996, p. 182. 手紙の日付は, 1860年9月。
- 7) *ibid.* p. 186. 手紙の日付は, 1860年10月。
- 8) 「ジャーニーマン」は, ヨーロッパ中世の手工業者ギルド以来続いてきた階層的身分制度の職人にあたる。Joe は親方で, Pip は徒弟。Orlick は徒弟奉公をすませた一人前の職人。
- 9) Pip を含め, 殆どの登場人物が「暴力」という蜘蛛の糸に絡まっている。Estella も, 養母 Havisham 婦人から歪に育てられ, 夫 Drummle からは家庭内暴力を受け続けた。
- 10) 不可思議な作品の展開の中で, 「暴力」という蜘蛛の糸を最初に張り巡らせたのは, Miss Havisham に偽りの結婚を仕組んだ詐欺師 Compeyson だった。
- 11) 14章の冒頭部分は,
 It is A MOST MISERABLE THING TO FEEL ASHAMED OF HOME. There may be black ingratitude in the thing, (p. 104) で, 主人公は自ら「忘恩」だと認識している。
- 12) 注6) 参照。Dickens 自身が, 構想の段階で 'grotesque idea' が浮かんだと語っている。
- 13) 注5) 参照。長年 Pip は, 姉の同様なヒステリー状態を体験したことを想像させる。
- 14) Pip が妻の姉 Mrs. Joe から受けた虐待は, 回想の中で,
 Through all my punishments, disgraces, fasts and vigils, and other penitential performances, (p. 59) と描かれているが, Pip はそんな姉を 'unjust' だと考え続けて育った。
- 15) 諷刺週刊誌 *London Punch* (1841-1992) の1860年前後の漫画に, 家庭の使用人たちの横暴さを描いたものが掲載されている。Pocket 家の使用人たちはまさに, *Punch* が諷刺したとおりの人々である。Lady や Mistress よりも, Servant や Cook, Nursemaid の力が上だった。
- 16) Clara や Wemmick と彼の恋人の老人介護のリアルな描写は, この作品が完成した2年後に亡くなった作者の母 Elizabeth への介護体験に基づいている可能性が高い。
- 17) 1864年は Shakespeare 生誕300年に当たる。*Punch* の1860年12月8日号には, ハムレットの父の幽霊への諷刺漫画が掲載されているし, この偉大なドラマティストに対する英国の人々の関心が高まっていたことは十分予想される。